

今こそ「黙学(もくがく)を「学習習慣」に

—コロナ禍の最終段階では「学習習慣」を身に着ける教育を！—

開倫塾

塾長 林明夫

Q:「黙学」とは何ですか。

A: (1)「マスクを常時着用し、もくもくとひたすら学び続けること」です。コロナ禍で身に着けるべき「学習習慣」として「黙学」をおすすめします。



(2)感染症対策では栃木県で有数の病院である「宇都宮記念病院」で視察させていただいた職員食堂では、病院のスタッフの皆様が、壁に向かってもくもくと押し黙って食事をされていました。私も、案内していただいた副院長で PCR センター長の森清志先生と、壁に向かっての食事をごちそうになりました。そこで「黙食」の大切さを教わり、「黙学」を思いつきました。

(3)以来、開倫塾の塾生の皆様に「黙学」をおすすめしています。

Q:なるほど。しかし、英語や国語など、声を出して読む「音読」をしたほうがよい教科はどうすればよいのですか。

A: (1)マスクの中で自分にしか聞こえないくらいの小さな声で「モゴモゴ」と「音読」することをおすすめしています。

(2)英語に限らず、よく「理解」した内容は引き続き「音読」つまり声を出して読む練習をすること。スラスラとよく読めるようになるまで「音読練習」をすることが、学習内容の「定着」のために欠かせません。

(3)そして、スラスラとよく読めるようになったら、何も見ないで言えるまでにする「暗唱」が、学習内容の「定着」のために全教科で必要です。

この「音読と暗唱」は、「マスクを着用したうえで、自分にだけ聞こえるくらいの小さな声ですること」が可能です。唇を震わすだけでも「音読練習」「暗唱練習」は可能です。是非、「黙学」の中に「小さな声での音読と暗唱」もお入れください。



Q:「黙学」を「学習習慣」として身に着けるとは、どのような意味ですか。

A:いくら各教科の内容を学ぼうとして立派な先生から塾や学校の教室での授業を受けても、基本的な「学習習慣」が身に着いていなければ、「今日はためになるお話が聞けてよかった」と思うだけで学力は身に着きません。

Q：エッ、基本的な「学習習慣」とは何ですか。

A：たくさん考えられます。

(1)一定の時間集中して机に向かうことができることが第一です。

*机に向かわなくても、二宮尊徳先生のように歩きながらも、集中して学ぶことができればOKです。



(2)「ある一定の時間」、じっくり学び続けることができることも大切な「学習習慣」です。

①これが身に着いていない人は、興味のあることをある一定の時間集中して勉強し続けると、練習になります。

②これには、座禅の練習が役立ちます。お腹から息を吸い、ゆっくり、ゆっくり吐く練習を試みましょう。

③自分が今行っているスポーツや芸術について、インターネットや本を用いて調べてみる。映像を見て学ぶことはおすすめです。

(3)「読書の習慣」も立派な「学習習慣」です。

①お気に入りの作家の本は、代表作だけでも最後まで読む。

②大切な本は2回、3回と何回も読む。

③これぞという文章や語句、大切な内容は「書き抜き読書ノート」に書き写し、繰り返し読んで自分のものとする。

*自己所有の本の余白には「書き込み」をどんどん行い、作者との時空を超えた対話をする。これを「マージナリア」といいます。



(4)「新聞を毎日読む」ことも立派な「学習習慣」です。自分で考える力、批判的思考能力が身に着きます。

(5)意味のよくわからないことばがあったら「気持ちが悪い」と考え、「辞書」で調べる。辞書で調べたことはカードやノートに書き写し、その場で意味を覚えることも素晴らしい「学習習慣」です。

(6)「学校図書館」や「公共図書館」を自由自在に活用することも是非身に着けていただきたい「学習習慣」です。高校卒業後に、大学や大学院に進学した後で一番大切なのは、「大学図書館」を最大限活用することだからです。小中高の時代からこの「学習習慣」を身に着けておくことは、一番役に立つ「大学進学準備」です。



(7)このような「学習習慣」の「基礎」となるのが、「もくもくとひたすら学び続ける」という「学習習慣」です。この「黙学」は、すべての「学習習慣」の「基礎」となるものです。コロナ禍の中で「黙学」をしっかり身に着けましょうというのが、私の提案です。

Q：学習塾、予備校、私立学校の幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

A：(1)いつ終わるともしれないコロナ禍ですが、このコロナ禍の中を生き抜く「学び方」は何かを是非、お考えください。

(2)そして、この貴重なコロナ禍という「体験」を乗り越え、コロナ禍後に伝えるべきものを磨き込み、将来に向けて受け継ぐべき「経験」として集大成していきましょう。

(3)「黙学」という「学習習慣」は、開倫塾の挑戦です。



Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も先生方がお読みになれば必ず参考になる本を、何冊かご紹介させていただきます。

(1) 哲学者で東京大学名誉教授の松永澄夫著「戯曲 母をなくして」東信堂 2021年4月1日刊です。本書は松永先生の青春3部作の最新作で、「幸運の蹄鉄一時代」東信堂 2019年10月15日刊、「或る青春」東信堂 2020年12月18日刊の続きです。巻が進むにつれて、わかりやすく親しみが増す現代版「哲学入門」です。同著「二つの季節」春風社 2018年3月28日刊や「めんどりクウちゃんの大そうどう」文芸社 2019年4月15日刊とともにゆっくりお読みください。



(2) 3.11から10年たった今、読み返して一番ためになるのは、ピューリツァー賞を3回受賞したトーマス・フリードマンの「かつての超大国アメリカ」日本経済新聞出版社 2012年9月21日刊です。同著「バイルートからエルサレムへ」朝日新聞出版 1993年9月10日刊からスタートし、「レクサスとオリーブの木」「フラット化する世界」「グリーン革命」と最新刊の「遅刻してくれて、ありがとう(上)(下)」日本経済新聞出版社 2018年4月24日刊まで、時系列にトーマス・フリードマンの目で見つめ直すと、素晴らしい現代史の勉強ができます。

(3) 2022年度から高校の「現代社会」に代わって「公共」が必須教科となります。大学入試の受験指導も大切ですが、高校生が折角「公共」を学校で学ぶのなら、「公共教育」についても見識を持ち、深めておくことが求められます。山岡龍一・齋藤純一著「公共哲学」(放送大学大学院文化科学研究科テキスト)放送大学教育振興会 2017年3月30日刊は、「公共」教育を担当する先生のためのメインテキストと考えます。宇野重規著「西洋政治思想史」有斐閣アルマ、有斐閣 2013年10月20日刊は、最もバランスのとれた標準的テキストとしておすすめです。

(4) 「公共」に関する古典といえば、アリストテレス著「ニコマコス倫理学(上)(下)」ワイド版岩波文庫、岩波書店 2012年2月16日刊と、西田幾多郎著「善の研究」ワイド版岩波文庫、岩波書店 1991年1月24日刊は避けて通れません。名著「善の研究」は、第3編「善」の第9章～第13章、「善」「人格的善」「善の形式」「善の内容」「完全なる善行」から読むとわかりやすいと考えます。そこだけでもOKですから是非、ノートを取りながらお読みください。

2021年9月7日(火)記

